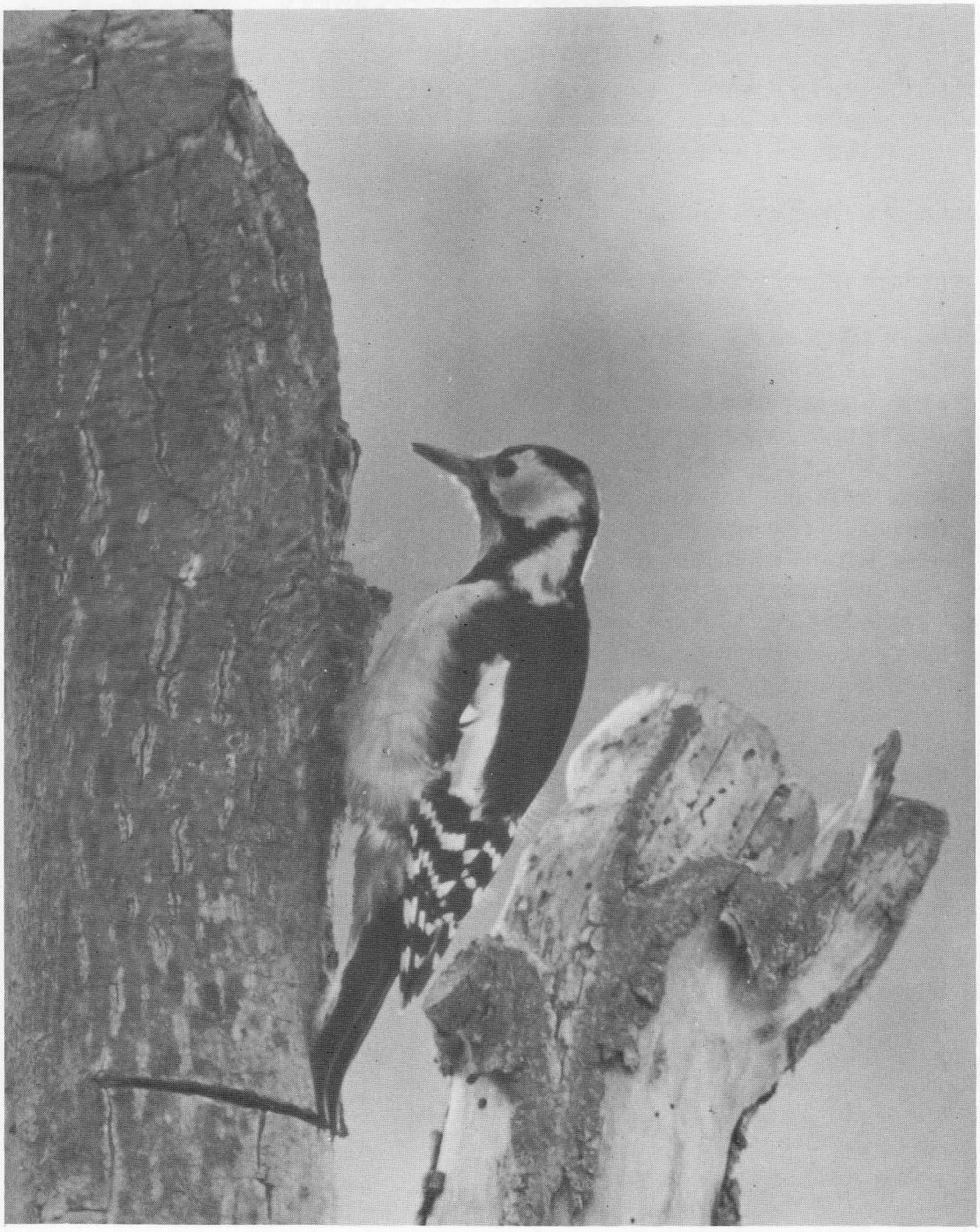
野鳥だより

—北海道—

第４６号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　昭和56年12月21日



アカゲラ　小樽市長橋　1981. 2.　撮影　斎藤正彦

もくじ

探鳥地案内（福移）……2
石狩川河口の鳥類……島田明英……3
朝里川のアジサシ……山田清二……6
藤の沢のオシドリ……野村梧郎……7
"北ぐにの鳥" うらばなし……斎藤春雄……8
野鳥の生活・行動について児童書のリスト……早瀬広司……9
探鳥会報告……鵡川……10
探鳥会案内……12
鳥民だより……12
編集後記……12

探鳥地案内 ⑯

福　移

◆**位置**　札幌市東区中沼町福移

◆**概況**　札幌市の北東部で、豊平川が石狩川に合流する、このあたりの休耕田、牧草地、水田、石狩川の河川敷で、主として草原の鳥をみる。

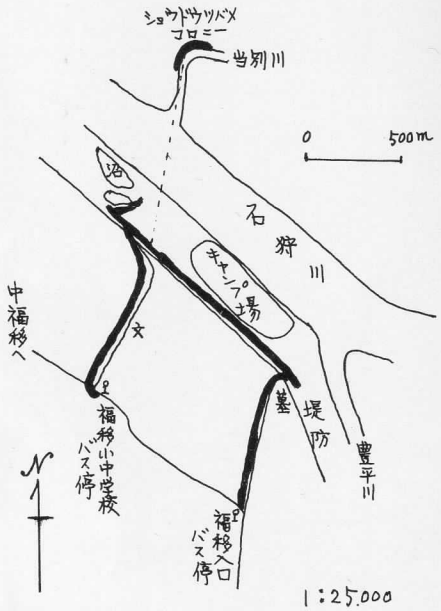
◆**交通**　市営バス、札苗線、中福移行き、市バスセンターから乗車、福移入口下車（乗車時間約30分）

◆**探鳥コース**　約3㎞、福移入口から両側の休耕田、牧草地をみながら堤防に向かう。この700mの間は、草原性の鳥が多い。堤防にあがり、河川敷にヤナギを主とした疎林、ササの生えているあたりで、鳥の出現を待つ。ノゴマ、オオジュリン、ベニマシコ、ノビタキ、カッコウなどがみられる。石狩川を右手にみて、堤防を北西に進む。今夏、市が河川敷をキャンプ場にしたため、この800mの間は、右手の牧草地に僅かに鳥がみられるだけとなった。小さな沼、その周辺の疎林で、コムクドリ、アカモズ、オオヨシキリ、エゾセンニュウなどがみられ、沼には、カイツブリ、バンなどもいる。福移小中学校前を通り、バス停へ。

◆**上記以外に見られる鳥**　アオサギ　カルガモ　トビ　チュウヒ　ウズラ　イソシギ　オオジシギ　キジバト　ヒバリ　ショウドウツバメ　ハクセキレイ　モズ　シマセンニュウ　マキノセンニュウ　コヨシキリ　ホオアカ　アオジ　カワラヒワ　シメ　ムクドリ　このほか稀であるが、ミサゴ　アリスイ　ヨシゴイなど。

◆**その他**　堤防上から当別川の崖を望むと、ショウドウツバメのコロニーがみえる。遠いので望遠鏡でないと無理。以前みられたシマアオジは2年前からほとんど見られない。北西に3㎞先の牧場ではみられる。冬は、オジロワシの飛翔をみることがあるが、積雪のため堤防上は歩けない。4月20日前後には、石狩川に何千羽ものカモが入る。堤防上からみるので遠いのと、すごい寒風に曝されるので防寒に注意。

◆**地図**



〒064 札幌市中央区円山西町3－3－26　羽田恭子

石狩川河口の鳥

島田明英

石狩川河口は札幌の北25kmに位置する。周辺は大部分農地や宅地になっており、また石狩湾新港関係の工場用地造成が進むなど、野鳥の生息環境としては特に優れた地域とは言えなくなってきている。しかし、札幌から近く、草原の鳥やシギ・チドリ類が見られるため探鳥に訪れる人も少くない。

私は1978年から3年間、石狩川河口周辺で野鳥の観察をしたのでその結果を報告したい。

＜観察期間＞

1978年7月から1981年9月までの3年2か月間である。この間の77回の観察結果を基にしてリストを作成した。観察は夏、秋に多く行い、冬、春は観察回数が少なかった。リストに示した鳥類の生息期間は、その影響を受けており、まだ不完全なものである。

＜観察範囲及び方法＞

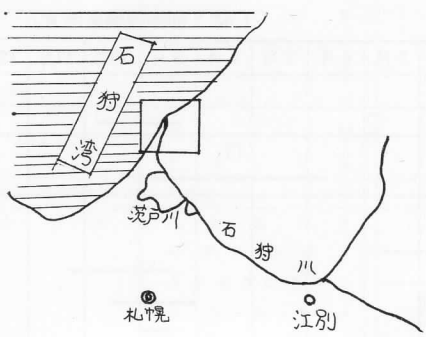
リストには石狩河口橋から河口までの約6kmの石狩川河川敷とその周辺で記録された種を示した。

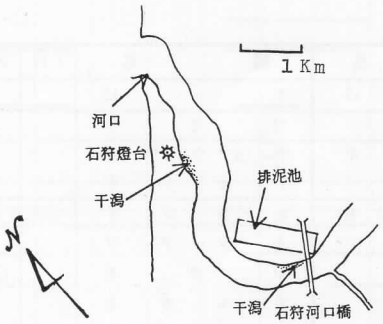
観察範囲内では川幅は200～600mである。上流側では人家や農地が堤防まで迫っている部分が多いが、市街地より下流側では、ヨシ原やハマナスを主とする海浜草原が広がっている。

河岸には2か所小規模な干潟ができることがあった。石狩川では河底の浚渫工事が行われており、浚渫した泥水をためるための排泥池が河口橋右岸に作られている。この排泥池や河岸の干潟はシギ・チドリ類をはじめ水鳥類の生息地となっていた。

観察は図に示した排泥池、2か所の干潟、河口の4定点を巡回する形で行ない、移動途中を含め観察範囲内で見られた鳥をすべて記録した。

図1　石狩川河口の略図





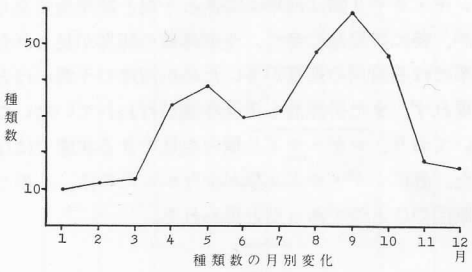
＜鳥相の概要＞

記録された鳥は13目26科97種であった。このうち水鳥類が約60%に当たる58種見られ、中でもシギ・チドリ類は32種と最も多く、この地域の鳥相を特徴付けている。水鳥以外では草原の鳥が多かった。観察範囲内には森林はないので、森林性の種は極く少数の種が記録されたのみである。

目別にみると多い目は、チドリ目40種、スズメ目25種ガンカモ目14種であった。

季節的には春と秋に種類数が多かった。春は5月がピークで38種、秋は9月に58種を記録した。これはシギ・チドリ類、ガンカモ類などの旅鳥の渡来によるものである。6、7月の夏季には草原性の夏鳥を主とする約30種が見られた。冬季は種類数は減少し、スズメ、カラス類などの留鳥に加え、少数のガンガモ類、カモメ類が見られるだけで、1～3月には10種程度しか記録されなかった。

図2　月別による種類の変化



＜主な鳥類グループの特徴＞

◆ガンカモ類

ガン類ではヒシクイが短期間見られただけであった。

カモ類は13種が記録されたが個体数は少く、最多でも50羽程度であった。渡来初期の９月には、マガモ、カルガモを主とした水面採餌カモ類が多いが、10月以降は潜水カモ類とアイサ類が多くなった。潜水カモ類で多かったのはキンクロハジロとホオジロガモであった。

観察範囲の上流に隣接する茨戸川では、春季500羽以上のカモ類が見られ、観察範囲内では見られなかったヨシガモ、トモエガモ、シマアジなども記録されているが観察回数が少なかったのでリストには加えていない。

◆シギ・チドリ類

33種が記録された。コチドリ、イソシギは繁殖しているが他の種は旅鳥である。

秋の渡来は８～11月に見られた。最盛期は８月末から９月中旬で、この時期に最も種類数が多かった。ハマシギは最も渡来数の多かった種だが、渡来の最盛期は他の種より遅く10月下旬から11月初めにかけてであった。ハマシギの他に個体数の多い種は順に、トウネン、オグロシギ、オオソリハシシギ、ダイゼン、メダイチドリであった。

春の渡来は４、５月に見られたが、個体数、種類数ともに少なかった。春に最も多かった種はシロチドリであった。次いでコチドリ、ハマシギ、キアシシギ、チュウシャクシギ、オオソリハシシギの順に多く、秋とは優占種がかなり異なっていた。

シギ・チドリ類は河岸にできる干潟と排泥池で見られたが、特に排泥池に多く、全個体数の66％が見られた。春季には石狩川の水量が多いためか河岸の干潟がほとんど現れず、また排泥池も浚渫作業が行われていないため乾いており、シギ・チドリ類の生息できる状態ではなかった。春にシギ・チドリ類が少なかったのは、このことも原因のひとつであったと思われる。

◆カモメ類

８種類が見られた。最も個体数の多いグループで、1,000羽以上が記録されることもあった。カモメとウミネコが多く、この２種でカモメ類全体の90％を占めた。

ウミネコは５～10月に多く、この期間カモメ類の60％以上を常に占め、特に７、８月に多かった。カモメは11～３月に多く、特に３、４月には平均500羽以上が見られた。

カモメ類もシギ・チドリ類と同様、干潟や排泥池に多かったが、河口やその周辺の海上で多数採餌していることもあった。

◆草原の鳥

主に石狩燈台付近の草原に多かった。ヨシ原にはコヨシキリ、オオジュリンが多く、ハマナスを主とする海浜草原ではヒバリ、ノビタキ、ホオアカが多かった。灌木林があまりないためか、ノゴマ、アオジ、ベニマシコなどは少なかった。シマアオジは排泥池付近で１番が見られただけであった。

＜最後に＞

石狩河口周辺は既に開発が進み、自然のままに残されている部分は少ない。その中で記録された97種という数は比較的多いものではないかと思われる。特にシギ・チドリ類は33種が見られたが、これは石狩河口の干潟や排泥池が極く小面積で、環境条件も恵まれているとはとてもいえないことを考えると予想以上のものであった。北海道の日本海側にはシギ・チドリ類の渡来地となる干潟が少ないことを考えると、石狩川河口はシギ・チドリ類にとって非常に重要な地域だと考えられる。

しかし、水鳥の多く見られた排泥池は人工的施設であり、やがてはなくなるものである。また、現在市街地より先の石狩燈台までの左岸に堤防が造られ、ヨシ原が大部分なくなってしまった。このような状況にあって、野鳥の生息地としての石狩川河口の将来は楽観できるものではない。

石狩川河口の野鳥リスト　(1978'7 ～ 1981'9)

○は１回の観察を示す。

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
アビ	アビ		○										
ウ	ウミウ					○				―	―		
サギ	チュウサギ								○				
	アオサギ				○		―	―	―	―	―		
ガンカモ	ヒシクイ									―			
	オシドリ				○								
	マガモ		○							―	―	―	
	カルガモ									―	―		
	コガモ				○					―			

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ガンカモ	ヒドリガモ				○						○		
	オナガガモ					○				—	—		
	ハシビロガモ									○			
	キンクロハジロ		—	—	—						—	—	—
	スズガモ										—		
	ホオジロガモ	—	—		○								—
	ミコアイサ												○
	ウミアイサ			—	—	—							—
	カワアイサ										—	—	
ワシタカ	ミサゴ								—	—			
	トビ			—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	チュウヒ									—			
ハヤブサ	ハヤブサ												○
	チゴハヤブサ						—	—	—	—	—		
	チョウゲンボウ										○		
キジ	ウズラ								—				
	キジ				○								
クイナ	クイナ							○			○		
チドリ	コチドリ					—	—	—	—	—	—		
	シロチドリ				—	—							
	メダイチドリ								—	—	—	—	
	ムナグロ									—			
	ダイゼン								—	—	—		
	タゲリ				○								
シギ	キョウジョシギ									○			
	トウネン					—			—	—	—		
	ヒバリシギ									○			
	アメリカウズラシギ										○		
	ウズラシギ								—	—			
	ハマシギ					—			—	—	—	—	
	オバシギ								—	—			
	ヘラシギ									—			
	エリマキシギ									—	—		
	キリアイ								○				
	ツルシギ									—	—		
	コアオアシシギ									—			
	アオアシシギ								—	—			
	クサシギ								○				
	タカブシギ									—			
	キアシシギ					—				—			
	イソシギ				—	—	—	—	—	—			
	コキアシシギ									○			
	ソリハシシギ								—	—			
	オグロシギ				○				—	—	—		
	オオソリハシシギ				—	—			—	—	—		
	ホウロクシギ									—			
	チュウシャクシギ				—	—				—			
	タシギ									○			
	オオジシギ									○			
ヒレアシシギ	アカエリヒレアシシギ					○							
カモメ	ユリカモメ				—	—	—	—	—	—	—	—	
	セグロカモメ	—	—	—	—	—				—	—	—	—
	オオセグロカモメ	—	—	—	—			○	○		—	—	—
	ワシカモメ												○
	シロカモメ	—	—	—	—	—		○			—	—	—

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
カモメ	カモメ												
	ウミネコ												○
	アジサシ												
ハト	キジバト												
ホトトギス	カッコウ												
アマツバメ	ハリオアマツバメ												
	アマツバメ					○							
キツツキ	アリスイ					○							
ヒバリ	ヒバリ												
ツバメ	ツバメ												
セキレイ	ハクセキレイ	○											
モズ	モズ												
ヒタキ	ノゴマ												
	ノビタキ												
	アカハラ					○							
	ツグミ										○		
	シマセンニュウ												
	コヨシキリ												
	オオヨシキリ												
シジュウカラ	ハシブトガラ										○		
	シジュウカラ						○						
ホオジロ	ホオジロ				○						○		
	ホオアカ												
	カシラダカ												
	シマアオジ												
	アオジ												
	オオジュリン												
アトリ	カワラヒワ												
	ベニマシコ										○		
ハタオリドリ	スズメ												
ムクドリ	ムクドリ												
カラス	ハシボソガラス												
	ハシブトガラス												

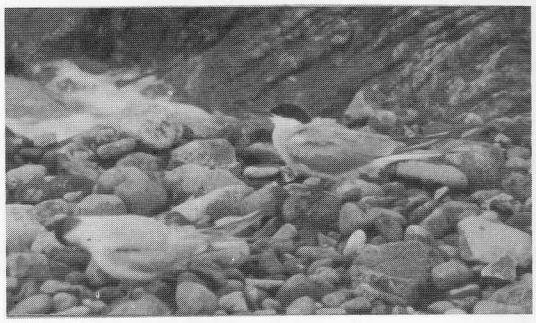
〒062 札幌市豊平区月寒東3—3

朝里川のアジサシ

山田清二

紅葉盛んな秋、各地の河川で耳にするのは、秋味（サケ）の便りです。

毎年、9月に入ると、朝里に2羽のアジサシが訪れます。今年で3年目になりますが、気象の異変か9月7日に13羽のアジサシが朝里川河口で、雨上がりの天気の中、陽なたぼっこをしていました。中に幼鳥なのか、頭が少し白っぽいのが何羽かおりましたので写真に撮ってみました。例年ですと空中を飛んで、海にダイビングするだけで、陸上にあがったのを見かけなかったのですが。鳥類図鑑などで見たよりも小さいです。種類が違うのですか……お便り差し上げます。



〒047-01　小樽市朝里1—3—17

藤の沢のオシドリ

野村梧郎

◆はじめに

藤の沢小鳥の村の小沢名誉村長から、オシドリを誘致したいがと相談を受けたのは昨年の秋のことだった。

場所は小沢さんの家の池、といっても完全に開放されていて、出入りは自由で、しかも子供に人気のある小沢さんが小中学生を特に歓迎している場所だ。

こんな場所で、オシドリのような美しい鳥の、生殖羽から非生殖羽、さらに生殖羽と変る、換羽の模様を観察できれば、教育的価値は高く、野鳥保護思想普及に大きな効果をあげるものと思った。

となっても、あっけらかんとしていて、オシドリこいこいではまず見込みはない。どうしてもおとりが必要になる。そうなれば行くところはひとつしかない。円山動物園にお願いし、教育的価値を認めていただいて、オシドリとカルガモ各1つがいの御入来となった。

このことで、わたしにも少し責任があるらしい。というのは、もう10年以上も前、藤の沢小学校の愛鳥行事に出席したとき、会場の上空をオシドリが1羽横切ったのに気付き、オシドリがと言ったのだが。そのとき小沢さんは藤野の沢にまだオシドリがいたのかと思っただけだったが、そのことを昨年になってあらためて思い出し、オシドリを呼び寄せる決心をしたというのだ。

◆オシドリ夫婦ということ

野生のオシドリが小沢さんの池に降りることについて少しは自信を持っていた。というのは、私が住んでいる西野の沢の発寒川には、春の渡りの時期に、オシドリの群がごく短時日だが渡ってくるのを、数年間続けて観察していたからだ。住宅地にごく近いところで、私の家から100メートルほどしか離れていないところでだ。

しかしこれは、オシドリが降りることはあるということで、そうなってみても、たとえ小沢さんの姿でも人影をちらっとでも見れば逃げるはずと思い、小沢さんの池に野生のオシドリが居つくのは数年先のことと、理由もなく決めていた。

なにをやってもハプニングは必ずおきるもので、春になるのを待ちかねていたようにして、オシドリとカルガモのメスがいなくなってしまった。原因はなんであれ、2羽のオスはそろってやもめになってしまったのだ。

4月下旬になると、小沢さんからオシドリが来たという電話が入るようになった。まずは予想どおり、ちょっとだけ胸を張りたい気分になっていた。ところが5月になって、「どこにも行かねェ」つまり居ついたのが現われたと連絡が入るようになり、これは少し話が早過ぎると驚くことになってしまった。

こんなことで小沢さんの池に来るようになったオシドリを、小沢さんの好意で観察させてもらった。そのおり気付いたことを少し報告させてもらう。

オシドリ夫婦ということばは、仲の良い夫婦の代名詞になっている。小沢さんの池にペア1組のほかにオスが2羽、つまりメス1羽とオス3羽の群がいたとき、この言葉を証明することとその逆の現象とが見られた。

ペアのオスは、メスにぴたりと寄り添い、メスが餌を食べているときは首をぴんと伸ばしてあたりを警戒している。メスが行こうとする方向に他のオスがいると、大急ぎでメスの前にでて追い払う。相手が逃げても許さずしつように追いかけて嚙みつこうとする。なかなかのナイトぶりだった。

ところがある日、このオスの様子ががらっと変ってしまった。池のいちばん奥の岸によって落着きなく、うろうろしているのだ。いっぽうメスは、10メートルほど離れたところで、別のオスと草の上に腹這いになっている。それまでには考えられないことだった。よく見るとこのオスのイチョウ羽根は、みにくく体にへばりついて、手入れをしている様子がない。これはこのオスの生殖期が終ったことを示している証拠と思った。

生殖期が過ぎで、大事にしていたメスに対する熱がさめてみると、ほかのオスがメスに近寄らないように追い払ったり、食事中のメスを守り護衛の任務を果すような勇気は、どこからも湧いてこない。だが、まだメスに対する未練が少しは残っている。それがこの日のこのオスの落着きのなさに表れたと思うほかはなかった。もしこの推測が正しいものとすると、オシドリ夫婦の実態はかなり怪しいものになってしまうのだがどうだろう。

◆気がついたこと

オシドリのオスは、エクリプスのときでも嘴が赤いので簡単に判別できるとされている。たしかに小沢さんの池で夏を過した2羽のうち、1羽は夏中ずっと、ほぼ赤といっても良い嘴の色をしていた。ところがいっぽうのほうの上嘴は強い曙色になってしまい、どこにも赤味は残っていなかった。ただ2羽とも下嘴は、はっきりした赤系統の色のまま夏を越した。この色は嘴下部の見え隠れする線になっている。

となると嘴の色でエクリプスの時期にオシドリの雌雄を判別しようとする場合、嘴の下部に要注意、少しでも

線状の赤が見えればそれはオス、ということになるのだが。よほど注意してみないと見落しかねないものだし、特に遠距離の場合、判別不能ということもあるはずだ。この時期、嘴の色で簡単にと思っていると、かなりのオスをメスにしてしまいそうだ。

オシドリの足は黄色ということになっている。そのとおりにオスの足の色は、エクリプスの時期に鮮やかさがなくなりはするが、黄色いことに変りはない。しかしメスの足の色は、どう見ても黄色とはいえず、オリーブ色と見たほうが良いような気がした。オシドリは地上にいることが多いカモなので、特にエクリプスの時期、この足の色の違いは雌雄を分ける良い判別点になりそうだ。

つぎに、これは今年だけのそれも小沢さんの池でだけの限られた観察で、結論づけることができないのは当然だが、秋の渡りの時期のオシドリの群は、メスと幼鳥が中心になり、それにオスの成鳥がついてくるように見えた。母親中心と思いたいのだが証拠はない。

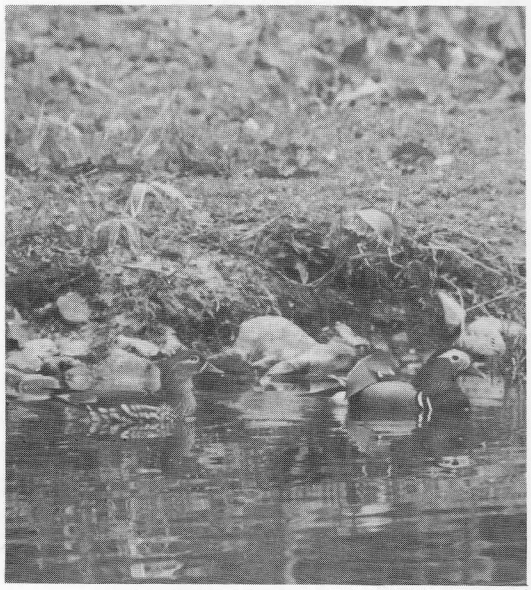
非生殖羽から生殖羽へ変る時期は、はっきり2グループに別れているようだ。早いのは9月中に羽根変りがほぼ完了する。これに対し、遅いほうは10月に入ってから徴候が現われ、徐々に進行していくが、10月23日現在まだ完了していない。前者を成鳥群、後者を幼鳥群の現象と思いたいのだが、これも「どうだろうか？」をつけざるを得ないのが現況だ。

◆おわりに

オシドリがくる小沢さんの池は、特に静かな場所にあるわけではない。小沢さんの経営する白鳥園は池のそばに建っているし、小沢さんの本宅をはじめ、農家が付近に散在している。テニスコートがすぐそばにあり、夏の間、小中学生の来園も多い。

白鳥園では50～60人の会食が度々あるし、芝生ではキャンプファイヤーをやることもある。それだけでなく夏の間、短時間だが毎日のように揚水ポンプのエンジン音がとどろく。こんな場所にオシドリを誘い寄せた小沢さんは、人間の生活を変えずに野鳥に生活の場を与えてこそ本当の野鳥保護という信念を持っている。

この信念がひとつの形になって表われたのが、オシドリの来訪であり定着だ。このためにはいくつかの好条件に努力を加えて相乗効果を生ませながら実を結ばせている。やればできることを示した好例として、われわれの記憶にとどめて置く必要のあることだと思う。



〒063 札幌市西区西野7条1丁目374—118

“北ぐにの鳥”うらばなし

斎　藤　春　雄

“野鳥だより”は毎号興味深く読ませて戴いておりますが、つい原稿を出しそびれ申訳けなく思っておりましたところ、“北ぐにの鳥”のうらばなしでもというお話で、それならばと何か書かせて戴くことにしました。

“北ぐにの鳥”を北海道新聞に書きはじめたのは、昨年7月からで、毎週1回、この10月末日で67回目になりました。長い間よく書かせてくれたものと感謝していますし、若しこれを読んでいて下さる方があるとすれば、心からお礼を申し上げたい気持でいっぱいです。この稿は、鳥について今までに知られていることを、そのまま書いているので、特別な苦労はしておりません。したがって、気のきいたうらばなし、といったものもないわけですが、それでも書いている間には、いろいろ忘れ難く、想い出になるものもありました。

この欄は、坂本直行氏が定評ある名文に、ご専門の絵をつけて連載されていた後をうける形なので、やり難いことは覚悟の上ではじめました。幸い絵の方は、昔一緒に仕事をしていた谷口一芳さんに引受けて貰ったので、全く安心しておまかせすることが出来ましたが、この外に恵まれたといえば、この稿が出るのは、土曜日の夕刊というまことに都合のよい版であり、更に紙面は札幌の場合は市民版、他の地方も恐らく同じような面に組込まれていると思いますが、この誰にでも親しみのある紙面の一角に出して貰えたということが、大いにトクをしているのでないかと思っています。

さて、今までに鳥の原稿を書く機会はありましたが、

最も書き難いのは新聞の場合です。このように、あらゆる人を対象としている舞台では、どう動いてよいのかは仲々見当がつきません。全く見てくれる人がいないかもしれませんし、恐しい人が目を光らせているかも知れません。近頃の新聞は、鳥をよくとりあげてくれますが、それを社会面のひとつとして見る人は多くても、纒った文章の場合、読んでくれる人がどれほどいるだろうかと考えれば、なんとなく不安になることもありました。

こうした時に「鳥には全く関心がなかったが、たまたまあの欄を見たところ、鳥とは仲々面白い生き物で、ことに人間の生活とも関連が深いことを知り、それからは続けて読んでいます」と、中年らしい男性から電話がきました。これは、私にとっては、ねらった的に矢が当ったようなもので、大いに張り合いも出てくるというものです。その上、この人は「電話帳でお宅を調べたら、同姓同名が五人いて、その一番はじめのダイヤルを廻したらそれがお宅で電話代を損しないですみました」と言ったので、その名前を聞くと、それは札幌でも名の知られたお金持ちの経済人でした。

このような欄を続けていくには、いろいろな書き方がありましょうが、まず読みやすく、ある程度の生態に加えた北海道との関係。それに適当な物語を入れるというのが常識でしょう。しかし、実際に当ってみると、そのバランスが難しく、生態的には面白くても、ちっともよい話が出てこない鳥もあって、立往生したこともあります。エピソードを入れる時には、自分の体験を出すのが最もよいのですが、その中でも、困った話や失敗談が最も受けることが判りました。観客心理というものなのでしょうか。

とにかく、道内には350種近い鳥がいるので、その中から何を採り上げるかということが問題です。予定回数に合わせ、出来るだけ季節感も考えて配分はしていますが、大切な鳥が抜ける恐れも出てきます。スズメやカラスのように、誰でも知っている鳥は、当然入れるべきですが、これらは成功するか、失敗作となるかは、はっきり反応があるので難しい相手でした。また、タンチョウのように、あまりに書かれすぎているものは、手がつけにくいので、年末の一斉調査の数字を出して逃げました。もともとこの稿は、気楽に読み通して貰うために、数字と年月日は出来るだけ少くし、これとは別の考えからですが、人名は一切出しておりません。また、時にはエリマキシギやクロトキのように、一般には殆んど知られていない鳥も登場させましたが、これは筆者の遊びとして許して戴きます。

今日のことですから、いずれの鳥も少くなっており、つい保護の話にかたよってしまいます。しかし、被害をあたえる場合は、それも明らかにしていますし、時には鳥肉のうまさも書きました。人間と鳥とのつながりは、あらゆる面にあるのですから。

長い間には、新聞社を通じ、或いは直接手紙や電話を貰い、よい勉強になりました。その数は次第に増えていますが、これだけを集めても、野鳥が現在の社会の中でどのような立場にあるのかが判るような気がしています。そして、それがとかく我々の考えているような甘いものでないことも、よく判りました。

〒064 札幌市中央区北3条西29丁目

野鳥の生活、行動について児童書のリスト

早　瀬　広　司

静修短大で野鳥観察のゼミを指導することになり、レポートを15名の学生に提出させなければなりません。その参考に野鳥の生活、行動について、専門書でなく、児童向けのやさしく解説した単行本はないか。それで市立図書館、野鳥愛護会の会員の所で実際に現物をみて、リストを作成しました。まだまだ不完全なものですので、ご教示により完全なものにしたいと思います。

リストは写真・図鑑、児童科学書、北海道の項目に分けました。児童書は発行所のシリーズ別に一括してのせました。それは著者別にするより、編集方針、内容を知る上に便利と考えたからです。

Ⅰ　写真・図鑑

あかね書房　科学のアルバム　カラー写真版

No.18　鳥居鉄也(1972)　ペンギンのくに・No.20　田中徳太郎(1972)　シラサギの森・No.21　林田恒夫(1973)　タンチョウの四季・No.29　行田哲夫(1974)　わたり鳥のひみつ・No.32　右高英臣(1974)　ライチョウの四季・No.37　菅原光二(1975)　ツバメのくらし・No.45　清水清(1975)　たまごのひみつ・No.47　右高英臣(1976)　ウミネコのくらし・No.64　福田俊司(1979)　フクロウ・No.70　菅原光二(1981)　カラスのくらし

福音館　日本の野鳥　藪内正幸

No.1　(1973)　にわやこうえんにくるとり・No.2　(1974)　そうげんのとり・No.3　(1976)　やまのとり〔Ⅰ〕・No.4　(1978)　やまのとり〔Ⅱ〕・No.5　(1979)　かわやぬまのとり・No.6　(1980)　うみのとり

福音館　かがくのほん　宮崎　学

(1976)　からす・(1977)　ふくろう・(1980)　魚をとる鳥たち

岩崎書店　カラー版自然科学

No.4　国松俊英(1981)　コアジサシの親子・No.6　松井繁(1981)　雪国のハクチョウ・嶋田忠(発行予定)　シジュウカラ・長谷川博(発行予定)　キセキレイ・平嶋彰彦／国松俊英(発行予定)　シラサギ

偕成社　カラー自然シリーズ

小林清之介解説・菅原光二写真(1978)　スズメ

小峰書館　カラー世界動物　田中光常

No.2　(1975)　はばたけハクトウワシ・No.5　(1976)　原野にまうタンチョウ・No.10　(1976)　北からの旅人　ハクチョウ

国土社　動物のふしぎな世界　沢近一九一

No.5　(1979)　鳥の親子・No.10　(1980)　魚をとる鳥

新日本出版社　写真絵本

宮崎学(1979)　伊那谷の森の友だち・嶋田忠(1980)　雑木林の鳥たち

小学館　小さな科学者　中村登流(1976)

No.5　鳥はとぶ・No.6　鳥のすづくり・No.7　森と鳥

Ⅱ　児童科学書

朝日新聞社　少年科学図書館

No.9　(1981)　動物たちの本能と知恵―鳥たちの世界―

文研出版　科学よみもの

小笠原昭夫(1975)　セキレイの歌・菅野琇一(1979)　おはようカモメくん

文理　動物たちの不思議な世界シリーズ

No.4　H・ホーク、V・ピット／吉村証子・牛島道子訳(1978)　フクロウ―夜空の王者―

大日本図書出版社　大日本ジュニアブックス・ノンフィクション

中村登流(1979)　森のひびき―私と小鳥との対話―・吉川繁男(1979)　ハクチョウと生きる―瓢湖のハクチョウをめぐって―・山岸哲(1981)　モズの嫁入り―都市公園のモズの生態をさぐる―

大日本図書出版社　子ども科学館

天野明(1979)　ライチョウの四季・国松俊英(1979)　セイタカシギ大空をとぶ・松田忠徳(1980)　クマゲラのいる島―赤いベレーをかぶったキツツキ―・宮崎学(1979)　クマタカの森と空―あこがれの鳥をみつめて―・中村登流(1979)　鳥のいるけしき―自然をみつめる目―

金の星社　生きものバンザイ　吉原順平

No.4　(1977)　ムクドリ巣箱70日―鳥の親子関係をさぐる―・No.9　(1980)　ハクチョウを追って―水鳥の巣のひみつ―

講談社　自然観察ものがたり　高橋健

No.1　(1979)　ふるさとの川の番人―カワセミ―　No.3　(1979)　湿原に生きるタンチョウ

小峰書店　自然科学シリーズ

No.7　宇田川竜男(1975)　カラスの話・No.15　佐伯敏子・桜井信子(1978)　庭にくる鳥・No.21　樋口広芳(1977)　森に生きる鳥―ヤマガラのくらし―

小峰書店　少年少女ノンフィクション

小林清之介(1976)　スズメの四季・小林清之介(1978)　野鳥の四季

誠文堂新光社　自然観察シリーズ

No.9　佐野昌男(1974)　雪国のスズメ

Ⅲ　北海道関係

河出書房新社

有沢浩(1973)　北国の森の博物誌―クマゲラ―

釧路市

橋本正雄(1979)　釧路新書5　鷗(ごめ)の話・釧路市叢書編さん事務局(1976)　タンチョウの釧路

朝日新聞社

石城謙吉(1981)　たぬきの冬―アオサギ・カケス・カッコウ・キツツキ・クロツグミ・スズメ・モズ―

釧路自然教育研究会

高田勝・黒沢信道・三浦二郎(1981)　根室地方の野鳥

〒063 札幌市西区山の手2条3丁目

鵡　川　56.8.30　9：30～13：00　溝井　茂

野鳥愛護会の探鳥会に初めて参加させていただきました。会員になってから数年を経過しているのですが、遠く札幌を離れた地におりますので、今まで参加の機会がありませんでした。それでも最近は道内各地で探鳥会が行われるようになっていますので初級者として非常に助かります。

個人的に鳥に興味を持ってからも、バードウォッチングとは野の鳥の有様を認識することにあると思っておりましたので、その方法論は十人十色、姿や生態を見る者にとって種の貴賤のあろうはずもなく、犬の餌を失敬しに集まる親子雀やゴミすて場に集まるハシボソガラスの

群れを観ていても、その中にそれぞれの楽しみがあって良いのだと考えています。

しかしてその本音は、知らないよりは知っていた方が良いのであって、カモを見て体色識別ができず、シギ、チドリなど型、姿の似たるを相手に図鑑と相談、森林にかくれたる忍者のごとき声はすれども姿無き者々に対しては、すべての鳥獣との対話を可能にすると言うソロモン王の指輪を欲するのみ。一度野外に出るや難問、奇問の十指に余るを持ち帰るは必定の体たらくでは困るのである。

さて、本日は知る人ぞ知る春秋のシギ、チドリ類の有数の探鳥地鵡川河口において、ベテラン諸氏の識別眼をたよりに、なみいる鳥を次から次へと判別してみせようと意気高く、前夜来の雨天も何のその一路集合地へ向った。集合時刻には雨も上り、雫にぬれた牧草地をかき分け河口へ向う。途中イソシギ、ヒバリ、ハクセキレイなどが見られ、牧草地の水たまりにムナグロの群れが十数羽。最早と図鑑を見て確認したが、幹事氏に言われるまでダイゼンが混っているのに気が付かなかった。河口に近づき、そこここに飛びまた歩き回るシギ、チドリの姿に解説の声「○○に××に、あれも、これも……」。まてまて慌ててはいけない。まず一種、次の種と確認してゆくのだが相当に手強い。一通り見てはまた種名を口の内で反芻しながら、終了するまでには何とか識別できそうな気がして来た。この日、シギ、チドリ類16種を含め約31種を見ることができた。

人が学ぶためには機会と時間が必要である。私もこの機会にしばらく鵡川に通うことにしよう。

（記録された鳥） アオサギ　トビ　チュウヒ　コチドリ　シロチドリ　メダイチドリ　ムナグロ　ダイゼン　キョウジョシギ　ハマシギ　オバシギ　キリアイ　タカブシギ　キアシシギ　イソシギ　ソリハシシギ　オオソリハシシギ　チュウシャクシギ　オオジシギ　ユリカモメ　オオセグロカモメ　カモメ　ウミネコ　ヒバリ　ショウドウツバメ　ハクセキレイ　ノビタキ　カワラヒワ　スズメ　ムクドリ　ハシボソガラス　（31種）

（参加者） 霜村耕介・耕一　小堀煌治　大坊幸七　柳沢信雄・千代子　西尾　勝　新妻　博　渡辺紀久雄　早瀬広司　谷口一芳・登志　天童雅俊　羽田恭子　溝井　茂　北尾　諭　長岡宏幸・範子・滋雄・ゆりこ　（20名）

（担当幹事） 早瀬広司　羽田恭子

〒084 釧路市大楽毛1丁目6

☆溝井氏は一年間札幌勤務で、この日探鳥会に参加。

鵡　　川　　56.9.20　10：00～13：30　　紅林幸子

記録づくしの8月の不順な天候とは裏腹に、好天続きの9月第3日曜日、鵡川探鳥会が催されました。汗ばむ程の晴天とあって、参加者も多く、まるで楽しい遠足が始まる様でした。愛護会の探鳥会には数回参加させて頂いておりますが、水鳥は今回が初めてでした。と言いますのも、山野の鳥はさえずりも美しく、色彩も豊かで、その姿も愛くるしく、心ひかれるのですが、水鳥はそういう意味での魅力にやや欠ける様に思えたのです。まだ見ぬ鳥達との出会いはそれなりに楽しみではあったのですが、不勉強で数種の名前をやっと図鑑で覚えた程度の実に心もとない参加だったのです。

干潟へ行くには広い牧場内を横切らなくてはならないのですが、都会育ちの私には、ま近で見る牛や馬の迫力に圧倒され、もし立ち向かって来たらどうしようなどと内心びくびくし、すぐに自然に溶け込めない自身を寂しく思いました。トビがそこかしこに居り、草原を歩く姿におかしみを感じました。しかし、倒木の陰に野ざらしになっているトビの幼鳥の姿を見出した時、常に精一杯生きることを強いられる自然界の厳しさをかいま見る思いがいたしました。

干潟では、オオソリハシシギ、ハマシギ、メダイチドリ等が、採餌に懸命でした。泥土には、彼等のいくつもの足跡と採餌による嘴の跡が幾可学模様のように残されていました。せわしげに歩き回るチドリの姿はユーモラスで愛らしく。長く美しい足を自慢げにゆっくり歩くアオアシシギの姿は優美であり、そして、すべての水鳥に共通するのは、飛翔時の華麗な姿でした。魅力不足などとかってに思いすごしていた自分を恥ながら、いつの間にか彼等に魅了されている自分に気づきました。夏羽から冬羽に変わっていることもあって、胸の白いムナグロやダイゼンなど、初心者には思っていた以上に見分けることは困難ではありましたが、会の方たちの説明を受けていくうちに少しずつわかる様になりました。昼食の時もすぐ近くまでハマシギが近寄ってきたり、また、四方のどこかに必ず鳥の姿を認めることができるのも、水鳥観察ならではの楽しさの様に思えました。足もとが悪く、裸足で奪闘なさった方たちもおりましたが、想像をはるかにこえた楽しい探鳥会でした。短くなった陽に追われるように、心を残して干潟を後にいたしました。

（記録された鳥） アオサギ　ヒシクイ　オナガガモ　ウミアイサ　トビ　シロチドリ　メダイチドリ　ムナグロ　ダイゼン　トウネン　ハマシギ　ヘラシギ　ミユビシギ　キリアイ　アオアシシギ　タカブシギ　ソリハシシギ　オオソリハシシギ　ユリカモメ　オオセグロカモメ　カモメ　ウミネコ　アジサシ　ヒバリ　ショウドウツバメ　ハクセキレイ　ノビタキ　スズメ　ムクドリ　ハシボソガラス　ハシブトガラス　（31種）

（参加者） 後藤芳彦　中村良助　池部恵三　近藤桂子

山本篤子　横田通典・円　清田吉晴・信子　長谷川涼子　北尾　諭　岩泉ゆう子　萩　千賀　浪田良三　長岡宏幸　羽田恭子　林　大作　大坊幸七　天童雅俊　霜村耕介・耕一　清水　幸・朋子　紅林雅文・幸子　柳沢信雄・千代子　青木二郎　田辺　至　五十川祐弘・ハナ子・ヒロカ・純矢・祐至　(34名)

(担当幹事) 北尾　諭　羽田恭子

〒064 札幌市中央区南6条西3丁目

最も寒さの厳しい時ですが、この季節でなければみられない鳥たちもいます。防寒に注意してお出かけ下さい。

＜野幌森林公園＞

昭和57年2月21日(日)　午前9時　国鉄大麻駅待合室　冬鳥の観察　歩行に適したスキーが必要です。

＜ウトナイ湖＞

昭和57年3月28日(日)　午前10時30分　ウトナイ遊園地　北帰途中の、ガン、カモ、ハクチョウやオジロワシなどを観察します。

＜野幌森林公園＞

昭和57年4月25日(日)　午前8時30分　国鉄大麻駅待合室　木々の葉が伸びきらず、鳥の姿の見やすい時です。何種類かの夏鳥の姿も見られるでしょう。

＜野幌森林公園を歩きましょう＞

上記のほか、野幌森林公園で探鳥散歩を行います。4月18日(日)午前8時30分、大麻駅待合室集合です。

いずれも、探鳥会は、ひどい暴風雪でないかぎり行います。昼食、筆記用具、観察用具をご用意下さい。いずれも午後2時頃には終了します。探鳥会についてのお問い合わせは、北尾 (011) 611―6455番へ。

北海道鳥学セミナーについて

南帰中のガン・カモが見られる10月18日（日）ウトナイ湖ネイチャーセンターにて第4回北海道鳥学セミナーが開催されました。まず最初に1人ずつ自己紹介・近況報告などとともに野鳥の保護施設やシマアオジの求愛動作などについて活発な意見交換をおこないました。午後からはレンジャー・安西英明さんによる「鳥のくらしむき」と小川巌さんの「鳥学研究史」の二つの講演があり、大変に熱気の入った雰囲気の中でセミナーを終えました。

鳥学セミナーに参加希望の方は下記まで連絡を

〒069 江別市大麻南樹町1道職員ＡＰ4―204　小山方
鳥学セミナー事務局

会費納入のお願い

昭和56年度分会費納入は、約3割の方が未納になっています。会費は、「野鳥だより」の発行など、会の活動の重要な財源です。未納の方は、お早く納入下さるようお願いします。納入の際は、郵便振替（小樽18287）をご利用下さい。

なお、昭和56年11月15日現在の会員数は、次のとおりです。

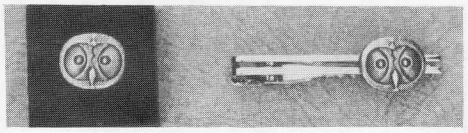
個人会員　419名
団体会員　　8名
合　　計　427名

(会計)

タイタック・ネクタイピンの販売について

本会のシンボルマーク（エゾフクロウ）をアレンジしたネクタイピン・タイタックを本会事業の一環として次のように販売しております。皆様のお買い求めをお願いします。

値段　ネクタイピン　1個1,000円（送料120円）
　　タイタック　1個　800円（送料120円）
申込先　本会フクロウ係（郵便振替　小樽6-16219）



〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

新しく編集委員に加わりましたので以後よろしく。今回の記事は道央周辺が多いのですが、人口密度的に見ていたしかたないものでしょうか。小さな記事でも優先して取りあげるつもりです。どしどしお寄せ下さい。また編集子としては、本誌の感想なども合わせてお寄せ下さい。冬期は野外で鳥と接するよりも、本や図鑑などで接することが多いと思います。机上の野帳の整理も忘れずに。　(猿子)

〔北海道野鳥愛護会〕　年会費　1,500円（会計年度4月より）　郵便振替　小樽 18287
〒060 札幌市中央区北1条西7丁目　広井ビル5階　北海道自然保護協会気付 ☎ (011) 251―5465